

# 九州型石錘からみた壱岐の海人の特質

大 庭 孝 夫

2024年 5 月

『西海考古』第14号 抜刷

# 九州型石錘からみた壱岐の海人の特質

大庭 孝夫

## はじめに

九州島の北西、玄界灘に浮かぶ壱岐島は、対馬島とともに九州と朝鮮半島との間に位置する。壱岐島は対馬島と比べ、かなりなだらかであるが、実際は浸食によって谷が幾筋にも形成された起伏のある地形である。

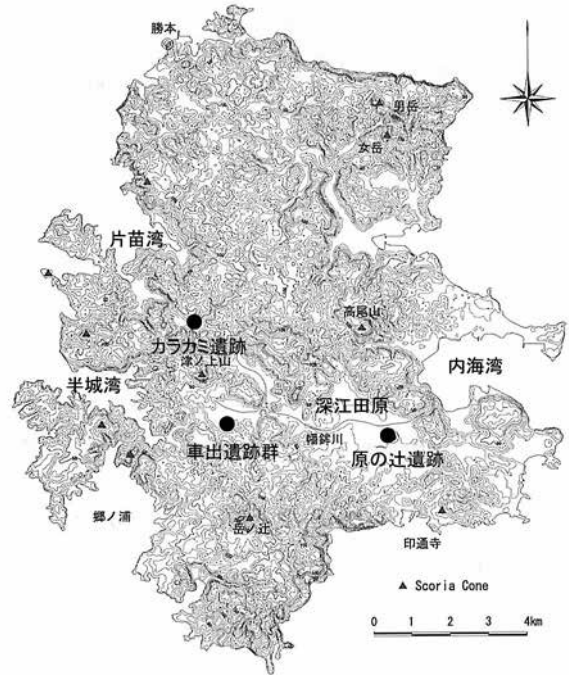
島周辺には対馬暖流が西から東に向かって流れ、島沿岸にはリアス式海岸が発達し、淡水と海水が混じった豊富な栄養を持つ海域が広がる。このことから、島周辺には沿岸魚から外洋魚まで多くの魚種に恵まれるが、その条件を活かし、交通の発展により、新鮮な魚介類のまま、東京・博多などの大消費地へ供給される一大漁場となっている。

壱岐島には、弥生時代後半期、『魏志』倭人伝の記事にある「一支（大）国」に比定された国が存在した。加えて、「南北市羅」という島外との交易を示す記事から、壱岐島内では長崎県で2番目の大きさを誇る平野である深江田原を有しているにもかかわらず、農業生産力としては不十分であったことを示している。このように、壱岐島は常に海に向かって進出していかなければならない条件を備えていたともいえる。

また、一支国の中核集落である原の辻遺跡において、青銅製の権等の青銅製品や計1,200点にものぼる粘土帯土器、楽浪系土器、三韓系土器、陶質土器の朝鮮半島系土器など、列島で最も多量に出土した中国・朝鮮半島に由来する多種多様な出土品が存在する（古澤 2016b）。このことから、壱岐島は弥生時代前期～古墳時代初頭にかけて、中国・朝鮮半島と列島を結ぶ海上交通の舞台となり、半島と列島とを行き交う人、モノ、情報の結節点・中継点としての役割を担っていた。

さらに、先の対外交流を示す遺物がまとまって出土した原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡群（第1図）で出土した骨角製・石製・鉄製の多種多様な漁具から、ヤス・モリを用いた刺突漁、アワビオコシを用いた潜水漁、釣針・石錘を用いた釣漁、石錘を用いた網漁など多様な漁労活動が想定される。このことから、通常は漁労活動に従事しながら、時には交易従事者あるいは渡航集団の水先案内人（中尾 2022 p.9）としての役割を担ったと推測される壱岐の海人の動向を知ることは、弥生時代～古墳時代初頭の日韓交流の具体相を検討する上で重要な手掛かりとなる。

筆者は、玄界灘沿岸地域の弥生～古墳時代の漁具の錘である九州型石錘を中心とする漁具について関心を払ってきた。しかし、先行研究では、石錘の所属時期が判明する事例が多くあり、かつ多くの開発に伴う発掘調査による集落遺跡データの蓄積があり、漁具だけではなくその背景となる集団関係や社会状況のある程度把握可能な博多湾沿岸地域を中心とするものがほとんどで、北部九州において



第1図 壱岐島内関連遺跡位置図 (1/200,000)  
(福田・中尾編2005 を一部改変)

博多湾周辺以外の漁労活動に焦点を当てた研究は少ない。

しかし、近年原の辻遺跡・カラカミ遺跡で漁具関連遺物が蓄積され、壱岐島内と博多湾沿岸地域との様相の相違について一定の傾向を把握できるようになったこと、また原の辻遺跡出土九州型石錘について資料調査する機会を得、形態だけではなく、製作技法及び使用痕、色調などを直接観察できたことで、より具体的に把握することが可能になった。

そこで、本稿では壱岐島出土の九州型石錘を中心とする漁具の分析から、弥生時代中期後半～古墳時代前期の壱岐島における漁労活動の変遷と特徴、集団構造などを考察することで、朝鮮半島と列島との交易を直接的に担った壱岐島の海人の在り方について論じてみたい。

## 1 九州型石錘をめぐる研究史

### (1) 九州型石錘とは

漁具である錘は、漁網の場合は海中で均一に網を張るため、釣漁の場合は対象魚類に向けていち早く効果的に沈める必要があるなど、漁具の中でも重要な位置を占める。

今回対象とする壱岐島を含む玄界灘沿岸地域では、弥生時代前期以降、これまでの漁網錘の石錘とは形態、重量、材質、出土量を異にする大小多様な石錘が出現し、それらは古墳時代前期にかけて盛行することで漁具・漁法が大きく発展したと考えられている。

特に下條信行氏は、これらの石錘についての集成作業と基礎的整理を行い、垂下式で、軟質で加工しやすい滑石を削りと研磨によって円錐形や分銅形、紡錘形という手の込んだ成形、加えて釣糸等を結びつけるための孔・溝を施すものや両端に突起を持った細長い棒状を呈するものなど、弥生～古墳時代にかけて、玄界灘沿岸地域を中心に分布する特徴的な沈子群を「九州型石錘」と規定した(下條 1984)。

さらに、本稿のⅠ類石錘の形態と分布から、大きくは「博多湾型」と「糸島型」、亜種としての「湯納型」に分類し、九州型石錘が出土する遺跡の多くが海浜部に立地すること、博多湾型は鹿児島県薩摩半島から福井県若狭湾まで広範囲に分布することから、博多湾を中心とする玄界灘における海上交易活動を担った、古代博多湾海人の活動内容が反映される遺物であると指摘した(下條 1984)。

### (2) 九州型石錘における研究略史

九州型石錘を巡る研究史については、林田好子・中尾篤志両氏によって整理されており(林田・中尾 2014)、ここでは主な先行研究を簡単に振り返ることとしたい。

まず九州型石錘の定義、分布、変遷、機能、使用した集団の在り方など多角的な検討により多大な成果を上げた下條信行氏の一連の研究がある(下條 1984・1989他)。

その後、下條氏の一連の研究に基づき、主に各遺跡単位で分類や位置づけが行われていたが、1998年から福岡県立修猷館高校改築工事に伴う福岡市西新町遺跡の発掘調査において九州型石錘とともに、飯蛸壺、製塩土器など多量の漁具関連遺物が発見されたことで、再び研究が活発になった。

山中英彦氏は、下條氏の研究を基礎として、弥生～古墳時代の石錘を含む漁具について総体的に取り上げ、検討を加えた。また漁具を九州型石錘や打欠石錘などの在来系の漁具、他地域から波及した土錘、飯蛸壺、製塩土器など外来系の漁具という、土器の系統区分と同様に漁具を在来系と外来系に区分した。その上で、漁具出土遺跡を類型化して、政治勢力との関係を含めて整理を試みた(山中 2007)。なお、山中氏は下條氏とは異なり、Ⅰ類石錘について、浮網等で使用する垂下する縦型の漁網錘であるとする。

乗松真也氏は、古墳時代前期前半、博多湾では備讃瀬戸北岸の袋網系網漁や刺網系網漁、大阪湾岸

の飯蛸壺延縄漁等の漁具・漁法の導入と九州型石錘を用いた在来の釣漁・網漁等、複数の漁法がみられる状況を整理した。また、西新町遺跡をはじめとする博多湾の港津的集落は、在来の漁具に加え、備讃瀬戸北岸で達成された操業規模の拡大化を伴った新たな漁労技術の導入によって、さらなる交易対象品としての水産物を調達し、交易への関与を強化、深めたと指摘した（乗松 2010）。

林田好子・中尾篤志両氏は、玄界灘沿岸地域を対象とした61遺跡、430点の九州型石錘の網羅的な集成に基づく地域別・形態別・時期別等の詳細な整理に加え、12～13世紀の長崎県の膝行神貝塚の土坑出土の滑石製石鍋片を転用したI類石錘に類似する資料の存在から、弥生・古墳時代の九州型石錘と中世に属する資料と系譜的な繋がりがある可能性を指摘した（林田・中尾 2014）。

森本幹彦氏は、I類石錘の中で底部がとがるタイプを新たにIC類として設定するなど、型式や分布、時期、用途等の再検討を行い、各型式の成立過程と分布状況から、I類石錘は博多湾西部が分布の主体で、下條氏が提唱した「博多湾型」「糸島型」という区分が適切ではないとした。さらに、博多湾の東西で在来系漁具の構成に差が明確にみられることを再確認し、古墳時代前期前半に畿内・瀬戸内系譜の外来系漁具と博多湾西部の在来系漁具を融合・再編したのが西新町遺跡であるとするなど、博多湾における海人集団の変遷について言及した（森本 2015a）。

筆者も石錘の分類と機能について整理し、弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域においては、石錘の素材、分布、形状、色調などの外形的な特徴と使用痕などの考古学的な観察、出土状況、近代の民俗例などから、いくつかの機能分化された器種ごとの漁労活動の使用場面の復元を行った。加えて、各種工具の鉄器化により漁具の形態的特徴が伝統を受け継ぎつつも、機能の有効性に応じてさらに特化した漁具を創り出した可能性を提示した。さらに、西新町遺跡を対象に、遺跡立地・環境や道具組成、地域社会、生業と生産、動物遺存体などの多角的な観点から、漁具の分析を基軸とした漁労技術、社会的な要因の検討を行った（大庭 2023）。

## 2 九州型石錘の分類（第2図）

石錘は各遺跡から未製品が出土するため、自家生産が基本であったと考えられるが（山中前掲）、近世でも釣針・疑似餌・釣竿等の漁具諸道具は個人所有品で、各自が加工を加えていた民俗例から（山下 2016）、加工が容易な石錘は漁具の中でも特に個性が強く、遺跡単位で多くのバリエーションが生じやすい要因となっており、細分しすぎると普遍的な分類ではなくなる。このことから、形態も重要であるが、機能まで考慮に入れた分類が必要である。また弥生～古墳時代の漁具は、現代の漁具と比較すれば未分化の段階と考えられるため、一つの漁具が多機能を有していた可能性があること、加えて民俗例における滑石製石錘の中には、成形が粗いままでも使用するにつれて角がとれて丸くなることで事足りている事例なども、細かい型式分類は不要であることを示している。

筆者は、下條氏の分類（下條 1984）を基礎に、より機能的な視点から分類・検討を行った山中英彦氏の分類（山中前掲）と森本幹彦氏の分類（森本前掲）を参考に分類を行った（大庭 2023他）。

### ① I類（下條大形A型）（1～5）

I類は上端部が尖り気味にせばまり、下端部が幅広くなる。下條氏の分類では大形A型にあたる（下條 1984）。断面は円形ないしはやや楕円形を呈し、体部には1～3の孔と主に長軸方向に紐ずれ防止用の上下端部とを結んだ溝が刻まれる例が多く、孔と溝を組み合わせて緊縛用の装置をなす。垂下式で重心が下部にあるので、いち早く水中に深く垂下させることができ、正確に海中の魚群の群れまで到達することができたとみられる（内田 2016 p.173）。玄界灘以外の同時代の類例は少なく、当該期の玄界灘沿岸の漁労活動を特徴づける資料である。

分類については、山中英彦氏（山中前掲）及び森本幹彦氏（森本 前掲）の分類に従い、底部形態が丸みを持つものをⅠA類（下條の大形AⅠ型（博多湾型））、底部に面を持ち、水平であるものをⅠB類（下條の大形AⅡ型（糸島型））、また森本氏は新たに紡錘形に近い、ⅠA類から派生した底部がとがるタイプをⅠC類として設定することから、本稿でも3つに小分類した。

加えて溝と孔の位置と数も分析にあたって重要な要素であるため、後述するⅡ・Ⅲ・Ⅴ類石錘と同様、1孔のものを「あ」、2孔のものを「い」とした。また上溝のものを「1」、全溝のものを「2」、長軸溝と短軸溝を併用するものを「3」とした。

## ②Ⅱ類（下條大形B型）（6～11）

平面形が対称的な紡錘形をなす、やや扁平な横型の錘で、長軸に一条の溝を施すものを基本とし、長軸方向に数か所の孔が開けられたものもある。下條氏は重量が80～500gの範囲内にあり、そのうち大型品は100～200gが最も多く、次いで300gがこれに次いでいること、一方小型品は8～25gの間であり、10g前後のものが多いとして大小に区分した（下條 前掲）。森本氏も50g以下を小型、50～100gを中型、100～250gを大型、250gを超えるものを超大型とし、小型品は10g未満が多いとする（森本前掲）。使用によりすり減って重量が減ったものもあるが、重量で概ねその用途を分けることが可能であり、特に50g以下の小型品のほとんどは釣用錘とみられることから、大型のものをⅡ類、小型のものをii類とした。この大小の区分は、Ⅲ～Ⅴ類も同様のものとした。

またⅡ類石錘のうち、体部断面も機能や編年に関わりがあるとされることから（森本 2015a p.305）、断面が円形に近いものを「A」、断面が矩形に近い扁平なものを「B」とした。さらに小分類として、Ⅲ・Ⅴ類石錘と同様に、溝が長軸のみが「1」、短軸のみが「2」、短軸と長軸両方が「3」、孔は1孔が「あ」、2孔が「い」、3孔以上は「う」に分類した。

## ③Ⅲ類（12）

平面形が楕円形をなし、左右対称のものである。長短比が長さ2対横幅1程度の球形に近いものをⅡ類石錘から区分したため、Ⅱ類より総じて小型である。なお、大小と問わず、ほとんどが単体で出土することから、多くが釣用錘と考えられる。

## ④Ⅳ類（13）

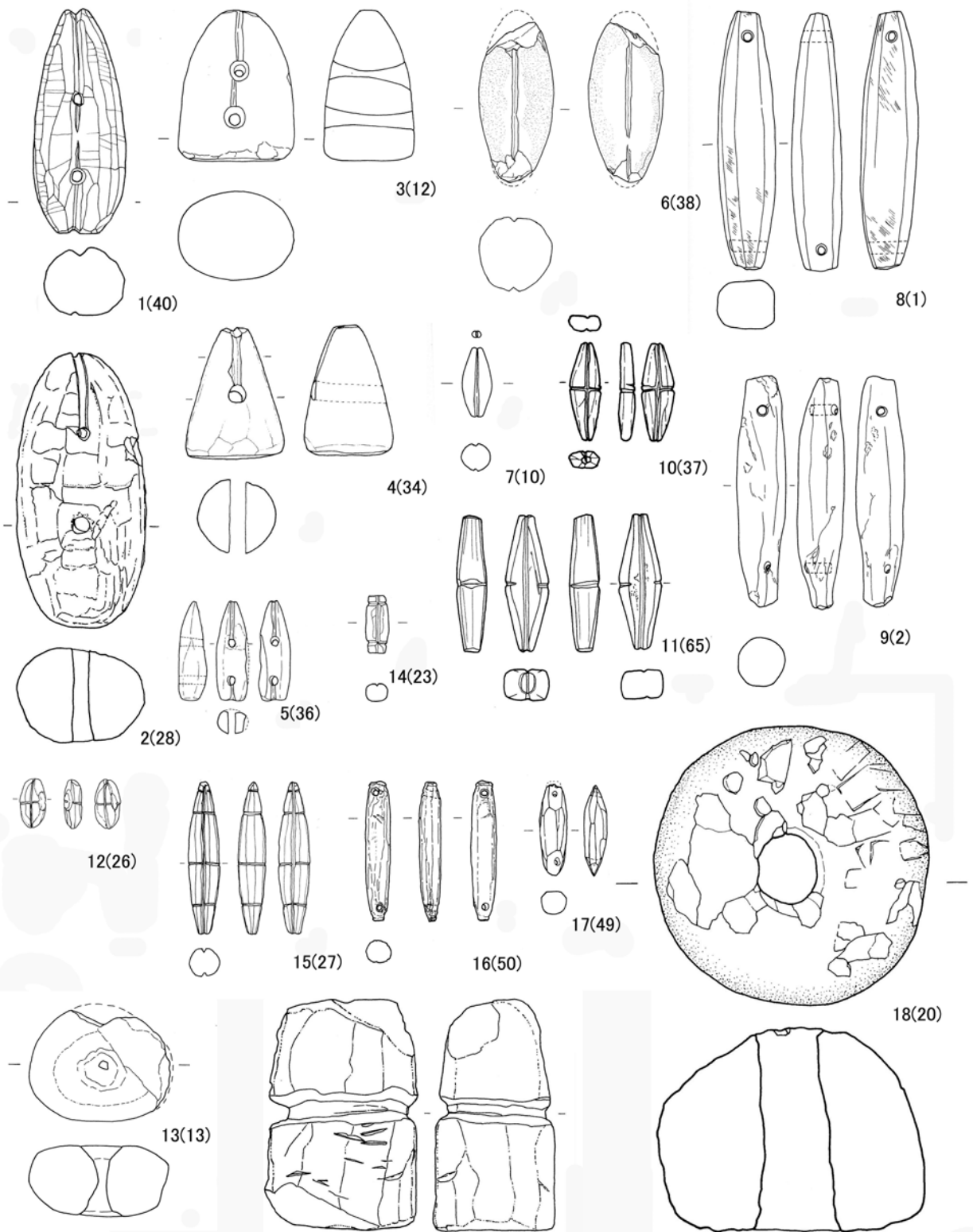
中央に1孔持ち、紡錘形をなすもので、大小の区別はⅡ類石錘と同様である。紡錘車との区別が難しいものの、紡錘車は正円で整った形となるものが多いが、漁具としてのⅣ類は調整・成形も粗いことから、区別が可能である。

## ⑤Ⅴ類（14～17）

細長い棒状で、両端に突起や溝、孔を持つ。細長い体部の両端に紐掛け用の突起を作り出さないしは施溝するものを「A」、体部に溝を持つものを「B」、両端に孔を持つものを「C」とした。福岡市海の中道遺跡出土鉛錘には、平均7.5g程度の両端に突起を持つものや2.5g程度の板状錘があること（山中 前掲）、本類はまとまって出土することはないため、大半が釣用錘と考えられる。

## ⑥Ⅵ類（半球形有孔滑石製品）（18）

中央に円形孔をもつ半球形または環状の超大型品で、いわゆる半球形有孔滑石製品である（橋口・八幡 1977）。下面径よりも体高が高く、円筒形を呈するものを「A」、下面径より体高は低いが厚みがあり、上面が平坦で、体部中央は丸味を帯びるものが多いものを「B」、下面径ないしはそのすぐ上が最大径を測り、上面はほぼ面をなさず、丸く収めており、断面が略三角形を呈するものを「C」、体高が低く、断面が扁平なもので、上面下面とも平坦であるものを「D」に細分した。また、上記の形状や法量による4分類に加え、副孔があるものを「1」とした。



番号後の( )は表1番号と対応

19(参考)

1・2: IA類 3~5: IB類 6: IIA類 7: iiA類 8・9: IIB類

10・11: iiB類 12: iiiB類 13: IVA類 14・15: vA類 16・17: vC類 18: VIB類 19: 参考 軽石製浮子

第2図 志岐島内出土九州型石錘分類図 (1/3)

### ⑦Ⅶ類（打欠石錘）

打欠石錘は扁平な礫石で対向する側縁の2ヶ所、もしくは四辺いずれも打ち欠きによる紐掛け部としての窪みをつくり出し、その窪みに綱を結び付けた網漁用の錘である。

下條氏が九州型石錘として規定したのは、Ⅰ～Ⅴ類までであるが（下條 前掲）、本稿ではⅥ類までを集成の対象としたため、本類は表1の集成には加えていない。

以上の分類に加え、丁寧に研磨しているものは、海中で光り輝き、魚の眼につきやすいという疑似餌的機能を持つことが想定されることから（大庭 2021）、丁寧に研磨するものを「●」、加工痕をそのまま残すものを「○」とした。また色調は、民俗例の釣用錘では白色、赤色、黒色のものないしはそのような色の布などを取り付け、集魚機能を高めたものが多いことから、色調も実際に資料調査したものの中心に記述した。

さらに、真鍋篤行氏による土錘・石錘の分析では、土錘の孔・溝幅が釣漁の場合は釣糸の太さ、漁網の場合は沈子綱の径と相関関係があるとし、孔・溝幅が漁具の特定に有効であるとする（真鍋 1995）。このため石錘の溝幅や孔径も計測し、表1を作成した。

## 3 原の辻遺跡出土の九州型石錘について

今回、林田好子・中尾篤志氏の集成（林田・中尾 2014）を基礎として、弥生～古墳時代前期の壱岐島内出土石錘について集成したところ、4遺跡、68点の存在を確認した（表1）。この資料のほとんどは原の辻遺跡で出土しているため、まずは同遺跡における様相についてみてみたい。

原の辻遺跡は、幡鉾川下流に形成された長崎県で2番目の大きさの深江田原に突き出た、南北に延びる標高10～18m前後の舌状丘陵とその周辺の沖積低地に展開する、面積100haに及ぶ大規模集落である。一部は自然河川を利用し、二重または三重の排水機能を重視したとみられる多重の溝が集落を取り囲み、一支国の中枢集落と特定されている。また木製農具や石庖丁などから水稻農耕、石鎌などからムギ類などの雑穀類、磨石・石皿などから堅果類など、水田経営を中心としつつ、畑作や堅果類で漁労活動など多様な生業活動が確認されている。

遺跡は弥生時代前期後半に丘陵先端部を中心に集落が形成されるが、それ以前との連続性がなく（古澤 2016a）、集落成立からほどなく円形粘土帯土器が確認され、集落が解体する4世紀中葉まで一貫して中国・朝鮮半島系の遺物の出土がみられる。加えて集落解体の要因の一つとして313年の楽浪郡、314年の帯方郡滅亡が契機となったという意見（宮崎 2001）から、対外交流にある程度特化した集落・集団像が窺える。ただし、各時代を通して「朝鮮半島系土器が弥生土器を凌駕する地点はなく、対外交流が集落形成の主要な目的のうちの一つ」と指摘されている（古澤 2016a p.218）。

原の辻遺跡の北側を貫流する幡鉾川に沿って約1km下流にある内海湾は、湾口に青嶋、赤嶋という島があり、外海が荒れていても湾内は比較的穏やかなことで知られる。この船の停泊に適した内海湾とそれに注ぐ幡鉾川を通じた立地、深江田原という水稻農耕生産に適した土地の広がり集落形成の要因となったという指摘（古澤 2016a p.218）は妥当なものである。

幡鉾川に近い集落北西の低地に位置する八反地区では、中国・朝鮮半島系土木技術とされる敷粗築工法による石積みと木杭で護岸された東西2つの突堤から構成される船着き場遺構や上流側で分水遺構が確認されている（註1）。この船着き場遺構は、原の辻遺跡の居住域が拡大し、多重の環濠が掘削され、多くの中国・朝鮮半島系遺物がみられる弥生時代中期前半に造営され、中期後半～後期初頭まで機能したとされる（白石 2020 p.21）。また幡鉾川から船着き場遺構に至る流路の復元から、外洋船である準構造船は内海湾で丸木船に積み荷を積み替え、幡鉾川を通じて原の辻遺跡に至る船を用い

た運搬経路が復元されている（白石 2020 p.28）。加えて、八反地区北の不條地区には弥生時代前期後半～中期後半の朝鮮半島系無文土器、中期後半～古墳時代前期の楽浪系土器が集中することから、対外交流の場合は船着き場も備えた遺跡北西の不條・八反地区が一貫して核になっていたと考えられる。

なお、集落形成期にあたる弥生時代前期後半に列島最古の準構造船が発見されているが、この準構造船の登場が遠距離交流を活発化させ、「朝鮮半島南部の後期無文土器集団が継続的に渡来して、故地との交流回路を維持しながら、船着き場遺構の築造など、一支国の対外交流を主導し、国づくりに関わった」との指摘がある（武末 2009 p.287）（註2）。

さらに原の辻遺跡では、弥生時代中期を中心に適度な硬さと粘りを持ち、加工しやすい鹿角製刺突具、「西北九州型」結合式釣針、かつて骨剣とも呼ばれた鯨骨製アワビオコシ・紡錘車などの骨角器がまとまって出土する。刀子柄などは弥生時代後期まで下るとみられるが、後期になるとこれらの骨角製漁具は大きく減少する。それに替わるように、弥生時代中期後半～古墳時代前期にかけて九州型石錘が盛行する。その半数以上が溝や河道、包含層出土で、かつ廃棄された状態であるため、実際の使用・廃棄時期を限定しにくい。原の辻遺跡では調査区に偏りがあるが、現段階の遺跡における九州型石錘の時期変遷、地区別の出土傾向についてみていきたい。

### （1）各型式の全体的な傾向（表1）

先述しているが、原の辻遺跡出土九州型石錘のうち、時期が特定できたものは半分以下である。本来なら地区ごとの時期的な変遷と特徴について詳細に検討すべきであるが、各地区の調査密度の問題や時期が判明する資料数の制約から、遺跡全体でないとな定的な傾向を把握できないため、ここでは遺跡全体の傾向を整理する。

検討の結果、釣漁用錘とみられる小型の部類が卓越し、網漁用錘の可能性のあるⅡA類石錘や刺網漁用（森本 2019）のⅥ類石錘、打欠石錘のⅦ類が少量みられるものの、複数の同型式の錘によるセット関係が確認できないため、漁網錘として確実なのはⅥ類石錘のみである。この要因として古代の網漁は水深の浅い場所で行うことが基本で、網漁が発達する海底の底質が主に砂泥からなる博多湾と比べて、壱岐島周辺は水深があり、岩礁帯が多いこと、かつ潮流も激しいため、漁網の利用が難しかったと理解できる。これは岩礁帯が多い海域でも有効な地曳網の錘である打欠石錘の出土が少ないことにも表れている。また釣用錘は釣竿とともに集落に持ち帰ったため、集落内で出土する。

一方、漁網の保管場所は内海湾近くに存在した可能性があるが、大量に捕獲できる網漁は壱岐島内の消費規模が小さいこと、古墳時代初頭前後の製塩土器の出土がないこと、さほど面積が大きい壱岐島では内陸部でも基本的に鮮魚のまま運搬できることから、壱岐島の人々はより新鮮な状態で捕獲できる釣漁や刺突漁での漁獲物を嗜好したことなどが考えられる。

このように漁網や釣漁で効率良く一度に大量に捕獲し、塩蔵加工して内陸部まで流通させた古墳時代前期の博多湾沿岸地域の在り方（大庭 2022）とは基礎条件が異なることから、原の辻遺跡の漁労活動においては一度に多く捕獲可能な網漁が低調で、釣漁や刺突漁が盛行したと解される。

なお、先述したように壱岐島内では古墳時代前期の製塩土器が未発見であることから、固形塩を用いた塩蔵加工は基本的にはなく、あったとしても濃い塩水に付け干すことで微生物の増殖を抑えた、一夜干しの干物加工が水産加工品として存在する程度と推測される。

### （2）時期的な変遷

#### ①弥生時代中期後半

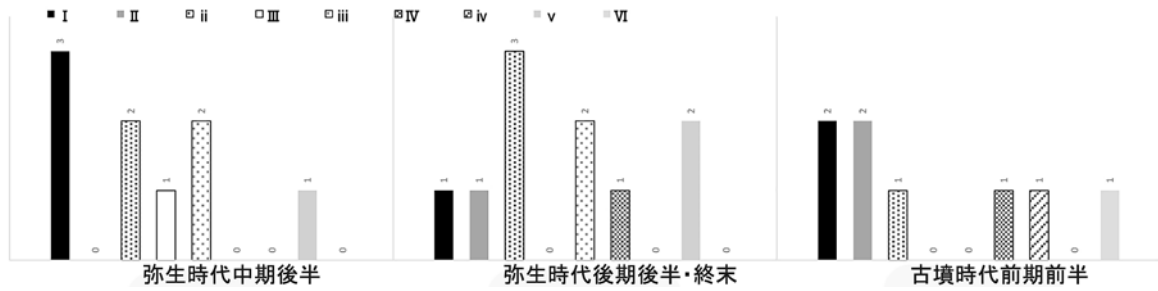
遺跡では弥生時代中期後半に九州型石錘が確実にみられるようになるが、その中でⅠ類石錘が安定的にみられることは注目される。中期後半の不條地区出土ⅠB-2-い類（第2図3）は滑石製であ

表1 豊岐島内出土九州型石錘一覧表(1)

番号	遺跡名	分類	出土遺構	石材		加工状況	法量			重量(g)	溝幅		孔径			挿入番号	時期(下限)	備考
				石材の種類	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)			
1		II B-ⅰ類	5号溝	頁岩	青黒色	●	12.6	2.8	2.4	139.1			5.0	6.0		39-74	弥生後期終末～古墳前期前半	断面六角形に面取り、粗い研磨痕が残る、角がしっかりとあるため未使用品か、上下孔は直交
2	原の辻遺跡(平成5年度調査)	II B-ⅰ類	T9-27区4層上部	頁岩	青黒色	●	11.3	2.4	2.5	79.5			6.0	4.0		39-75	弥生後期終末～古墳前期前半	全体的に摩滅が進む、孔の摩滅と表面の剥離は使用によるもの、特に下孔は下方方向に紐を下げたことにより剥離し、下方方向に強い力が加わったもの、上も紐掛ずれ痕あり、上下孔は直交、両端はケズリにより、細くなる
3		ⅱ A-3類	不明				5.0	1.9	1.5			0.5	1.5			39-76		
4		ⅱ A-1類	5号溝	砂粒砂岩			4.6	2.2	1.5	21.4	1.5					39-77	弥生後期終末～古墳前期前半	
5		ⅱ A-1類	1号溝排土・表探品	頁岩	黒色		4.5	1.9	1.9	19.0	1.5					39-78	弥生中期～後期か	
6		ⅱ A-1類		頁岩	黒色		4.1	1.6	1.3	10.6	0.5					39-79		上下平坦に加工
7		ⅱ A-1類	2号溝				7.7	2.3	2.2	48.8	2.5					39-80	弥生中期～後期か	
8		v A-1類	2号溝	頁岩	黒色		7.4	1.3	(1.0)	(9.0)	1.0	1.0				39-81	弥生中期～後期か	表面剥離、欠損
9		VID類					12.7		1.2				19.0			39-85		半分欠損、かなり薄い
10		ⅱ A-1類	1号旧河道か南側包含層V層	粘板岩			3.5	1.5	1.3	7.0	0.5					37-12	弥生中期後半	
11	原の辻遺跡川原・不條地区(平成7～9年度調査)	ⅱ B-1類	1号旧河道か土器溜VI層	砂岩			3.4	2.0	1.7	16.0	2.0					37-13	弥生中期後半	一部欠損
12		I B-2-ⅰ類	1号旧河道P100区IV層	滑石	赤灰色	●	7.4	5.7	4.9	285.0	2.0		3.0	5.5		37-14	弥生中期後半	下面稜線欠ける、全体的に摩滅
13		IVA類	土器溜VII層	凝灰岩			7.2	5.7	3.5	79.0			4.0			37-17		
14	原の辻遺跡原地区(平成8年度調査)	VIA類	A5区包含層3層	凝灰岩			(9.6)		4.5	(250.0)			35.0			108-15	弥生後期終末	半分以上欠損、床面平坦
15	原の辻遺跡八反地区(平成10年度調査)	v C類	E区落ち込み	頁岩		○	6.0	1.5	6.0	10.0	4.5					54-46	弥生中期前半か	孔は上端部に1ヶ所、下端部は切込みのみ
16		ⅱ B-1類	B区10号土壇	頁岩		○	5.0	1.9	8.0	20.0	1.5					54-47	弥生中期後半	
17		ⅲ A-1類	C区5層	頁岩			5.8	3.2	(2.9)	(53.0)	3.5	1.5				54-48	弥生中期後半	1/3欠損
18		ⅱ A-3類	原7区	片岩系か		●	4.8	1.6	1.2		2.0	1.0				66-40	弥生後期後半	
19		ⅱ A-3類	原7区	片岩系か		●	5.4	2.2	1.8		3.0	3.0				66-41	弥生後期後半	
20	原の辻遺跡原7区(平成10・11年度調査)	VIB類	4a層	凝灰岩	灰色	●	13.8		10.0	1,679.5			30.0			88-48	古墳前期前半	表面気泡が目立つ、剥離使用によるものか、被熱痕あり、主孔ノミ状工具による、底面凹凸と石材からすべりはあまりよくないか
21		ⅱ A-3類	A区IV層	砂岩			5.3	1.9	1.6	19.8	2.5	2.0				58-37	弥生後期か	
22		ⅱ B-1類	土器溜	砂岩			3.4	2.6	1.2	16.7	2.0					58-38	弥生中期前半～後期終末	断面扁平
23	原の辻遺跡不條・八反地区(平成11年度調査)	v A類	2号旧河道II層	頁岩			2.8	1.1	0.9	4.8	2.0	1.5				58-39	弥生後期～古墳前期	
24		v C類	2号旧河道II層	頁岩			(5.4)	2.9	1.5	(11.7)			6.0			58-40	弥生後期～古墳前期	半分以上欠損
25		v B類		頁岩			(5.2)	2.1	1.6	(10.9)						58-41		半分以上欠損
26		ⅱ B-3類	SD1 I層	頁岩		○	2.5	1.3	0.9		2.0	1.5				16-1	弥生後期後半	上面は平坦に整形
27		v A-3類	SD3 I層	頁岩		●	7.5	1.5	1.4		1.0	0.5				43-1	弥生後期終末	長軸溝1、短軸溝4
参考	原の辻遺跡八反地区(平成13年度調査)	浮子	SD3 II層	軽石	灰黄色		11.4	7.2			13.0					48-18	弥生後期終末	浮子、加工痕みえない
28		I A-1-あ類	SD3 II層	滑石	灰白色、一部赤色	○	13.7	6.4	4.6		4.0		5.0	9.0		48-19	弥生後期終末	表面には加工痕残る、赤味がゆがるため、博多湾沿岸地域からの搬入品か
29	原の辻遺跡八反地区(平成14年度調査)	ⅱ A-ⅰ類	落ち込みD31VI	細粒砂岩		●	(8.0)	1.6	1.3	(21.8)			3.5	3.5		22-10	古墳前期前半	下端部欠損
30		II A-2類	表探				10.6	7.1	5.5	369.1			7.0			22-12		自然石を利用か
31	原の辻遺跡高元地区	I類か	B10 I区I層	砂岩	灰色、一部赤色	●	3.8	2.9	2.2	21.8	2.0		7.0			49-3	弥生中期後半か古墳前期	下半部欠損した後転用、水中で光ることはない素材か
32	原の辻遺跡八反地区(平成14年度調査①)	ⅱ A類	SD02	軽石			3.6	1.7	2.0				2.0			23-6	古墳前期前半	
33		v C類	第10調査区	頁岩	黒色	○	(6.0)	1.4	(9.0)				6.0			53-6	弥生後期後半	下端部欠損、裏面欠損

表1 宍岐島内出土九州型石錘一覧表(2)

番号	遺跡名	分類	出土遺構	石材		加工状況	法量			重量(g)	溝幅		孔径			挿回番号	時期(下限)	備考
				石材の種類	色調		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		長軸の溝幅(mm)	短軸の溝幅(mm)	1番上の孔径(mm)	上から2番目の孔径(mm)	上から3番目の孔径(mm)			
34	原の辻遺跡 高元II区(平成15年度調査)	I B-1-あ類	II区A'ブロック 4層周辺	滑石	灰白色	●	6.5	3.2	4.5	173.8	3.5	9.0				73-16	弥生中期後半か	表面使用による摩滅、底面は丁寧な研磨、溝・孔には使用による剥離、SK25に本来伴っていた可能性あり
35	原の辻遺跡 高元F区(平成16年度調査)	II A-3類	2層	頁岩			9.6	2.5	2.4	66.0	0.5	0.2				40-82	弥生後期終末	
36	原の辻遺跡 石田高原地区A・B区	I B-2-い類	SD03 5層	凝灰岩	灰色	○	4.9	(1.4)	1.0	12.1	2.0	1.5	4.0	3.5		58-68	弥生中期後半か 古墳前期か	全体的に摩滅、風化もすすむ、一部欠損
37	原の辻遺跡 石田高原地区(平成19年度調査)	ii B-3類	B-II区 落ち込み31層	頁岩	褐灰色	○	4.9	1.6	1.0	8.2	1.0	1.0				32-4	弥生後期後半	
38	原の辻遺跡 (平成20年度調査)	II A-1類	5区2層	砂岩			(7.9)	3.7	3.7	(120.5)	3.0					46-35		上端部欠損
39		ii A-3類	3区4a層	頁岩			(3.1)	1.6	(0.8)	(4.5)	2.0					46-36	弥生後期	大部分欠損
40	原の辻遺跡 原地区	I A-2-い類	B区 I層	滑石	灰色	○	11.2	4.6	4.0	296.2	4.0	5.0	5.5	8.0		12-126		溝内には加工痕がないため、使用による摩滅か、下溝に紐ずれ痕あり
41	原の辻遺跡 不條地区	VI B類	D2区				(23.0)		(13.2)				60.0			9-88	不明	半分欠損
42	原の辻遺跡 池田大原地区	ii B-3類	10区 2層	頁岩			(7.0)	1.4	0.7	(20.0)	2.0					113-1		下端部欠損
43	原の辻遺跡 原地区	iii B-1類	9-B 土坑	頁岩			3.6	2.0	1.5	20.0	2.0					113-2		
44		v B-い類	中区SD-5	頁岩	青黒色	○	7.4	1.8	1.8	32.0			3.5	3.0		26-12		石製穿孔具を転用か、上面切込3、下面切込4で紐かけ
45	原の辻遺跡 八反地区(平成13年度調査)	II A-1類	南区SD-5	緑泥片岩			15.0	5.2	4.0	478.0	3.5					26-13	弥生後期後半～ 古墳前期前半	
46		I A-1-あ類	南区SD-5	頁岩	青黒色		8.4	3.2	(1.2)	(30.0)	2.5		5.0			26-14	弥生後期後半～ 古墳前期前半	裏面剥離、顕著な摩滅なし
47		IV A類	北区B-27層	凝灰岩		○	9.6	(6.2)	4.5	(299.0)			25.0			26-16	弥生後期後半～ 古墳前期前半	下半部欠損、孔内に加工痕
48		I -3-い類	V区SC-4	頁岩	オリーブ黒色	●	(9.7)	(2.5)	(1.8)	(38.0)	2.5	1.5	4.0	6.0		66-4	弥生中期後半	下半部欠損、孔は使用により摩滅
49	原の辻遺跡 原地区	v C類	Q29 3層	頁岩	灰黄色	○	(4.5)	1.3	1.1	11.6			1.0	2.0		66-5	弥生後期前半～ 後半か	
50		v C類	U-11 3層	頁岩	黒色	○	10.2	1.8	1.8	38.4			3.0	3.0		66-6	弥生後期前半～ 後半か	
51	原の辻遺跡 (平成11・12年度調査)	ii A-2類	Q29 柱穴	頁岩	黒色		4.1	1.2	1.2	10.2	1.0					66-7	弥生後期前半～ 後半か	
52		ii B-1類	H-9 柱穴			○	6.1	2.2	1.8	35.6	2.0					66-8	弥生後期前半～ 後半か	
53		iii A-3類	B-11 3層	頁岩	黒色		3.3	1.6	1.4	10.4	1.0	1.5				66-8	弥生後期前半～ 後半か	
54	原の辻遺跡 高元II B区	v A-2類	包含層	滑石		○	(2.7)	(0.8)	(0.8)		0.6					8-16	弥生中期後半か	面加工
55	原の辻遺跡 原X V区	v A-2類	SC23	頁岩		○	6.4	(0.8)	(1.0)	(5.3)	0.6					27-3	弥生中期後半	下端部欠損、半分欠損
56	原の辻遺跡 高元III・IV区	ii B-い類	土器溜	頁岩	灰色	○	6.0	3.0	1.4	44.0			4.5	3.0		38-188	弥生後期後半～ 末	
57	原の辻遺跡 高元IV区	ii A-3類	2～5区	砂岩			4.4	2.0	2.0		2.5	2.0				29-145	弥生中期後半・ 後期終末	
58	原の辻遺跡 高元V区	ii 類未製品か	包含層	安山岩			5.8	2.2	1.7	32.0						17-123	弥生中期～ 後期	
59	原の辻遺跡 原X V区	v A類	包含層	流紋岩			5.6	1.2			3.5					51-265	不明	両端に切込、断面楕円形
60	原の辻遺跡 高元X区	ii 類未製品	SD-1トレンチ埋土	頁岩			6.0	1.3	(0.8)	(8.6)						13-158	弥生中期後半	未製品、裏面欠損
61	車出遺跡	I B-2-う類	D-1区 III層	滑石			7.2	2.2	2.4	41.1	3.0		4.5	4.5	7.0	14-39	弥生中期～ 後期	
62		ii B-3類	A-3区 IV層	頁岩		○	5.7	2.1	2.0	22.4	2.0	1.5				14-40	弥生中期後半～ 後期終末	
63	カラカミ遺跡 東亜考古学 会第2地点	ii B-1類	F区	粘板岩		○	5.8	1.9	1.1	15.0	1.0					49-392	弥生後期後半か?	
64	カラカミ遺跡 第5～7地点	v A-3類	7tr 5層	頁岩		○	(5.7)	1.6	1.3	(14.0)	4.0	4.0				53-354	弥生後期後半	下端部欠損
65		ii B-3類	B-8 4層	砂岩		○	4.8	2.1	1.5	11.0	2.0	1.0				65-395	弥生中期後半～ 後期後半	短軸溝は全周しない
66	カラカミ遺跡 第1地点	ii B-3類	B-8 5層	砂岩		○	4.1	1.5	1.4	10.0	2.0	1.0				73-439	弥生中期後半	
67		ii A-1類	B-10 5層	頁岩		○	3.8	1.8	1.8	17.0	2.0					73-440	弥生中期後半	
68	國柳遺跡	ii A-1類	II区	滑石			4.0	1.8	(1.2)	(10.0)	2.0					11-82	弥生中期後半か 後期後半	裏面欠損



第3図 原の辻遺跡出土九州型石錘時期別変遷



第4図 顕著な摩滅があるI類石錘  
(壱岐市教育委員会所蔵)

ること、ずんぐりむっくりした釣鐘形を呈する形態的特徴は、糸島市御床松原遺跡出土石錘に近い印象があり、博多湾・糸島地方周辺からの搬入品の可能性がある。

さらに、時期は不明ながら原地区出土の滑石製 I A - 2 - い類 (第2図1) は、表面の加工痕が顕著で、加工痕が海中で光り輝く多面加工の役割を担っていた可能性がある。加えて底面に摩滅痕がなく、孔と下溝は摩滅する。この第2図1は弥生時代中期後半～古墳時代前期と幅がある資料であるが、形態的には糸島市一の町遺跡に類似例がある。また高元Ⅱ区出土 I B - 1 - あ類 (第2図4) における孔・溝の顕著な摩滅は、博多湾・糸島半島の I 類石錘によくみられる使用痕跡と同様のものであることから、同じ漁法で使用されたと判断できる。石田・高原地区出土の I B - 2 - い類 (第2図5) は小型の I 類石錘であるが、全体的に顕著な摩滅痕が認められ (第4図)、この状況は車出遺跡例 (表1-61) と同様である。この小型の I 類石錘は、摩滅状況から錘自体が海底に直に接する場面での使用状況が予測される。よっ

て、I 類石錘の主な機能としてはイカ釣具の錘である可能性を想定しているが (大庭 2021)、この場合はイカ釣漁以外の釣漁での用途も考えるべきであろう。

以上のことから、博多湾沿岸地域の I 類石錘は弥生時代中期後半～後期前半に大型化、定型化するが、壱岐島にも大型化・定型化してまもない I 類石錘と漁法が時間を経ることなく伝播し、基本的に同じ漁法で使用されている。このように、両地域では先の消費規模をはじめ、魚種や海の環境などの諸条件は異なる点も多いものの、博多湾・糸島半島の海人と壱岐島の海人との漁労技術に関する恒常的な交流の存在が窺える。これは、壱岐島を介した対外交流に際し、糸島半島の海人集団の関与を想定する中尾篤志氏の玄界灘沿岸地域の漁具の傾向の分析 (中尾 2022) と、同様の結論である。その他中期後半には釣用錘である ii・Ⅲ・iii・v 類石錘が先の I 類石錘と同様、博多湾・糸島半島から導入されたとみられる。

#### ②弥生時代後期後半・終末

弥生時代後期初頭～前半にかけて、遺跡では環濠や船着き場が機能を停止、朝鮮半島系土器の出土も低調化し、集落が一時衰退するとされるが (松見・古澤 2016 p.224)、この時期に確実に属する九州型石錘はなく、漁労活動の痕跡は不明確である。近年の酸素同位体比年輪年代法等による詳細な気候変動の研究により、紀元前後の弥生時代後期初頭以降において急激な降水量の増大が指摘されているが (中塚他編 2021)、原の辻遺跡における後期初頭の集落の衰退についても以前より大規模な水害等自然災害の存在が予測されている (松見・古澤 2016 p.224)。このことから、原の辻遺跡の一時的

な衰退は急激な降水量の増大により、幡鉾川に近い遺跡北部の船着き場遺構を含む対外交流の場が大きく影響を受け、対外交流機能が一時機能不全になったことで、集落自体の役割の低下などがあったと理解できる。さらに、洪水が頻発・大規模化することで、幡鉾川に近い低地部分の水田の灌漑水利機能も影響を受けて水田経営を再構築する必要が生じたため、集落が一時衰退したことなどが予測される。

以上のことから、原の辻遺跡にかわり、規模は縮小するが海浜から距離があり高台の安定した場所に立地するカラカミ遺跡、車出遺跡群の盛行は、数年に一度の洪水に備えるなどの目的で内陸部の両遺跡に原の辻遺跡の集団の一部が移動したとする見解（松見・古澤 2016）は支持できる。加えて、環境変化によりこれまでの原の辻遺跡の集団経営が不安定になったと予想されることと、自然災害によるリスク分散ないしは集住によるメリットが低下したため、新たな可耕地を求めて集落を構成する複数の居住単位の一部が移動した可能性、つまり後のカラカミ遺跡で示される集落・集団ごとに付帯する網羅的な生業形態へ移行した可能性がある。

後期後半になると、九州型石錘の多種多様化と出土数が顕著に増加する博多湾・糸島半島、唐津地域と比べ、原の辻遺跡自体は出土数の増加傾向はみられないものの、多種化から漁労活動の多角化、活性化は窺えるが、釣用錘が中心であることには変わりがない。

なお、距離的に近い唐津市神田中村遺跡等、唐津地域で顕著にみられる紡錘形に近い、底部が尖るタイプであるⅡC類石錘が壱岐島で全くみられないこと、唐津地域では大型石錘であるⅥ類石錘がないことも合わせて、壱岐島における石錘からみた漁労技術の交流相手としては、常に博多湾・糸島半島周辺の海人との接触割合が高かったことが指摘できる。

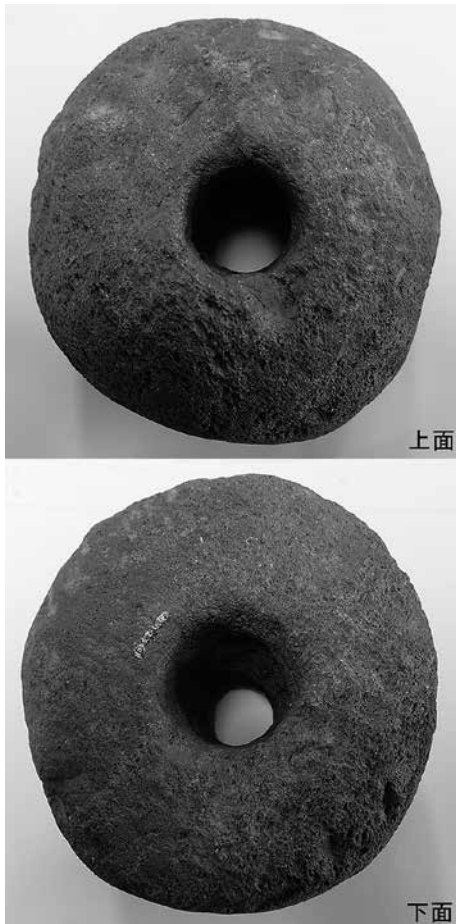
この時期、原の辻遺跡独自の形態である、細長い断面六角形を呈するⅡB-い類が出現する。第2図8のⅡB-い類石錘は、重量が139.1g、ほとんど使用痕及び摩滅痕がないことから未使用品に近いと推測される。一方、同じくⅡB-い類石錘で顕著な使用が認められる第2図9は、上下孔にいずれも紐ずれ痕が顕著で溝状になっており、特に下方向に負荷がかかっていることから（第5図）、釣用錘であると想定される。また、上下2孔の孔径が4～6mmと細い糸を通していったこと、重心は下部にあり、対象水域まで早く垂直に沈む形態、色調は青黒色、疑似餌的機能も併せ持ったと推測される骨角器の錘のように、疑似餌的機能も併せ持った錘が想定される。

以上、ⅡB-い類石錘は大型魚を対象とする釣用錘の可能性が指摘できる。北部九州では弥生時代後期から鉄製釣針が普及し、このことがⅡB-い類石錘を創出させた可能性がある。このⅡB-い類石錘の出現と弥生時代中期を盛期とする骨角製漁具の衰退は時期的に整合することから、弥生時代後期後半、壱岐における漁労活動内容に大きな変化が生じたことが窺える。

ちなみに、ⅡB-い類石錘を用いた釣漁では大型魚を捕獲する際、船自体の転覆の可能性があり、釣針にかかった大型魚を弱らせて



第5図 原の辻遺跡出土ⅡB類石錘  
(壱岐市教育委員会所蔵)



第6図 原の辻遺跡出土半球形有孔滑石製品・ⅥB類  
(壱岐市教育委員会所蔵)

下面に凹凸もありすべりが悪く(第6図)、博多湾沿岸地域のⅥ類石錘のように滑石製で平坦な下面が海底で滑りやすくするという優れた特徴を有することに比べて、機能的には弱い。以上のことから、出土点数も少ないため確定できないものの、博多湾沿岸地域の網漁技術が導入されたものとして評価される。

この博多湾系網漁の伝播は、漁獲量の拡大をもたらしたと考えられるが、集落としては衰退期にあたるため、需要の拡大という面もあるが、博多湾と壱岐島との海人同士の日常的な漁労技術の交流により、効率の良い新たな水産技術について積極的に導入を図った結果とみられる。

古墳時代前期後半以降は、原の辻遺跡が解体されることから、九州型石錘の出土は確認できない。

### (3) 地区別の出土傾向

原の辻遺跡の地区別の型式ごとの出土傾向について円グラフと地区割図を合成したものが第7図である。時期不明なものも含んでいるため、前節の時期的な変遷の検討よりは分析点数が増えているものの、各地区の時期別変遷を示すほどの資料数はない。

まず、遺跡の丘陵部北側の原地区と高元地区、遺跡北西の低地部の不條地区、八反地区にほぼまとも出土する一方、集落の東側にはほとんどみられない。これは弥生時代中期後半～後期を中心とする楽浪系土器の出土分布が西側に偏ることと調和的であり、対外交渉と海人との関係性を裏付けるものである。また丘陵部南部の石田大原地区、池田大原地区でも出土するが、点数は少ない。

ただし、不條地区と八反地区でも石錘を含む漁具がまとまる様な状況ではなく、集落内において漁

釣り上げる必要があり、釣漁だけではなく、ヤス・モリによる刺突漁を組み合わせた複合的な漁法をとっていたと思われる。一方、摩滅が顕著なⅡB-い類(第2図9)は海底を曳きずりながら捕獲する、いわゆる海底近くに棲む魚類を対象にした漁で使用された可能性を考えている。

さらに、第2図19の軽石製浮子は軽石に施溝し、面加工している。博多湾の軽石製浮子は自然の軽石に若干溝をつけるかそのままの使用がほとんどであり、壱岐島の独自性がみられる。このように弥生時代後期後半～終末にかけて、多種化とともに、独自の石錘・浮子を創出するなど、壱岐島の環境に合わせた壱岐海人の創意工夫がみられる。

なお、この変化の背景として、自然資源の生産強化という面に加え、先の自然環境変化に伴い大きく影響を受けた、水田の集約的な土地利用を志向したことにより生じた新たな水田造成や灌漑技術の導入に伴う耕作集団の労働編成の変化が関係している可能性も考慮に入れる必要がある。

### ③古墳時代前期前半

古墳時代前期前半になると、石錘出土点数が減少し、漁労活動自体の低調化傾向が見受けられるが、Ⅵ類石錘は博多湾沿岸地域より伝わったとみられる(第2図18・第6図)。Ⅵ類石錘は遺跡からは2点出土しているが、博多湾沿岸地域のⅥ類石錘と同様の使用痕跡であることから、同様の刺網系漁網の錘として使用された可能性が高い。ただし、凝灰岩製で気泡が目立ち、



労活動エリアといえるものはないことから、漁労活動エリアが固定化されている状況は認められない。

さらに、集落中心部である原地区でⅠ類石錘やⅥ類石錘などの出土は、集落の中核域にも漁具をメンテナンスするために集落に持ち帰ったと想定され、この範囲にも海人が居住していた可能性がある。

#### (4) 小結

原の辻遺跡における九州型石錘は博多湾・糸島半島とほぼ同様の多種多様な器種で構成され、弥生時代中期後半からⅠ類石錘等が存在し、未製品の出土が報告されていない。以上のことから、弥生時代中期後半に博多湾・糸島半島の漁労技術をそのまま導入し（註3）、積極的に水産物の獲得に乗り出したことが推測される。網漁具や釣漁具は人が持ち込み、漁法も含めて伝えない限り、正確には伝わらないことを前提とすれば、博多湾・糸島半島の人々が直接伝えたことは間違いないであろう。

弥生時代後期後半・終末のⅡB類石錘や面加工のある軽石製浮子という漁具の改良・進化は、博多湾・糸島半島からの漁具・漁法の導入だけではなく、壱岐島の地域集団が海の生態系や環境に合わせた独自の漁法を創出した結果とみられる。ただし、古墳時代前期前半にはⅥ類石錘を用いた刺網系漁網を博多湾沿岸地域から新たに導入していることから、博多湾・糸島半島と原の辻遺跡の海人同士の日常的・継続的な漁労技術の交流が確認できる。

このように原の辻遺跡では、弥生時代後期後半・終末段階のみ独自の漁具・漁法が存在するが、基本的に博多湾・糸島半島周辺からの漁労技術の強い影響が認められ、かつ多量に漁獲できる網漁の発達が発達が顕著でないことから、漁法の多様化にとどまり、漁労活動規模の拡大、水産物加工・流通の発展などを見出すことができない。これは島内の消費量に限界があったこと、アワビの採捕・加工とアワビ真珠の採取は別にして、原則島外への水産物の流通も志向しなかった結果とみている。

また原の辻遺跡では周囲に農耕可能な広い平野部を持つ立地と出土遺物などから、生業としては水稻農耕がメインと推定されること、先の石錘の出土分布から漁労活動に特化するような集約性が高い状況はみられず、専門的な海人集団の存在は窺うことができない。

ただし、海人の船の操船技術の高さと知識、屈強な身体能力については、釣漁用錘が卓越する状況や弥生時代後期後半・終末の外洋の大型魚を対象とした可能性があるⅡB類石錘の存在から壱岐の、海人が仲介者となって様々な財の物流や中国・朝鮮半島までの長距離交易の水先案内人等の役割を担ったことが予測される。一方、協業が必要な網漁の未発達から海人専門集団として組織化・システム化されていたかという点で、集落衰退まで未発達な状態であったと想定される。

## 4 カラカミ遺跡における九州型石錘について

カラカミ遺跡は、島北西部の標高80m前後の小高い丘陵頂部のカラカミ神社を中心に展開し、山を越えた約2km西には片苗湾が位置するという、海から少し離れた丘陵上の集落遺跡である。近年総括報告書が作成され、遺跡の様相が具体的に明らかにされた（松見編 2022）。

遺跡は弥生時代中期中葉に形成され、古墳時代前期まで集落が継続したと考えられる。丘陵頂部を取り囲むように掘られた大溝や弥生時代中期後半には半地下式の鍛冶炉をはじめ、弥生時代後期前半～後半の地上式の周堤付鍛冶炉（地上式周堤付炉跡）が確認されており、交易を通じて入手した鉄製品や板状・棒状の鉄素材を加工した鉄器生産が想定されている（山梨 2019）。さらに、原の辻遺跡に比べ、格段に鉄器の出土量が多く、かつ生産に係る鉄器の器種やサイズも揃っており、多方面の手工業生産に充当された可能性がある。加えて、別地区でベンガラ焼成炉とみられる遺構からベンガラ生産の痕跡も確認されており、集落内の地区分けされた複数の手工業生産部門を有する先端的集落であったことが指摘されている（村上 2022 p.473）。ただし、出土したすべての鉄器の器種を生産でき

る技術をカラカミ遺跡の鉄器生産集団が持っていたとは思われず、少なくとも素材、伐採斧、武器などは朝鮮半島に依存していたとみられる。なお、鍛冶工房が原の辻遺跡で未確認であることは、玄界灘沿岸地域の対外交流と流通の拠点となった集落では、鍛冶工房と流通センターが分離・分散する傾向が強いとの指摘（森本 2023）と同様の在り方を示す。

ただし、調査が実施された範囲は丘陵部上のみであり、どの程度丘陵上の集落と関係する範囲で谷部である低地部が開発されていたかが大きな課題である。

大溝からは大量の土器、骨角製ヤス・モリ、鯨骨製アワビオコシ、鉄製釣針や鉄製ヤス、鉄製アワビオコシをはじめとする漁具や動物遺存体が発見され、先の原の辻遺跡よりも漁労活動の割合が高いことが窺える。さらに、刺突漁や潜水漁、釣漁を中心とする漁具の様相や貝類が比較的多く出土することから、漁労活動域は浅海が主体で、原の辻遺跡と同様、博多湾・糸島半島のように効率よく大量に捕獲するような漁労活動を積極的に行っていたとは考えにくいことから、漁労のみに特化した集団ではないと理解されている（松見 2016）。

カラカミ遺跡では弥生時代中期後半～後期後半、釣用錘である ii・iii・v 類という小型石錘のみ認められることが特徴で、丘陵部の集落のみ調査したということはあるにせよ、原の辻遺跡と比べ出土量はもとより、少ない器種構成である。先の刺突漁や貝類の採捕も合わせても、漁労活動としては小規模である。カラカミ遺跡の集落規模は原の辻遺跡に比べ小さく、博多湾・糸島半島を中心とする新たな漁労技術をあえて逐次導入する必要はなく、従来の漁労活動、技術によって食料を確保できた可能性が考えられる。さらに器種構成の少なさは、博多湾・糸島半島の海人との漁労技術交流も原の辻遺跡と比べ少なかったことが推測される。

その他の漁具もヤス・モリ・鯨骨製アワビオコシ、鉄製釣針など、新鮮な魚介類を捕獲するための漁具のみみられることから、基本的に自給自足的な漁労活動内容であったと想定されるが、原の辻遺跡と同じく、刺突具は刺突漁だけではなく、釣漁と刺突漁を組み合わせた複合的な漁法で使用されたことなども考える必要がある。

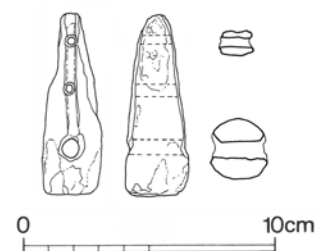
このように、漁労諸活動の範囲や内容もかなり限定されると予想されることから、カラカミ遺跡の集団は専門的な海人集団まで発達している状況は確認できない。

## 5 車出遺跡群における九州型石錘について

車出遺跡群は、原の辻遺跡の約 5 ㎞西、原の辻遺跡横を流れる幡鉾川上流に位置する、標高 10～20 ㎞前後の小規模な盆地を中心に展開する 5 つの遺跡からなる遺跡群である。遺跡から山を越えた約 1.5 ㎞西で半城湾にたどり着く。調査例が少なく、原の辻遺跡やカラカミ遺跡と比べ不明確であるが、カラカミ遺跡と同様、弥生時代中期中葉に形成され、古墳時代前期まで継続すると考えられる。なお、車出遺跡群では丹塗土器や大型甕の出土割合が高いことが特徴である。

車出遺跡群では、I B 類石錘と ii B 類石錘が各 1 点確認できるが、もう 1 点出土しているようである。特に滑石製の I B-2-う類（第 8 図）は、上部の摩滅がかなり激しく、博多湾・糸島半島と同様のイカ釣り漁法で用いられていないとみられるものの、本資料は滑石製であることから、博多湾・糸島半島からの搬入品の可能性がある。

原の辻遺跡と車出遺跡群ではともに I 類石錘が出土し、小型の釣用錘のみのカラカミ遺跡とは漁労活動の様相が異なる。車出遺跡群は不明な部分が多いが、谷部を抱える集落立地、水田経営、土器の器種や形状、



第 8 図 車出遺跡出土 I 類石錘 (1/3)  
(壱岐市教育委員会蔵)

胎土から、原の辻遺跡との関係性が窺える。一方、カラカミ遺跡とは様相が一致しないことから、カラカミ遺跡の集団は原の辻遺跡・車出遺跡群の各集団とは連携関係にはありつつも、一定の距離間をもって独自の集落運営をしていたとの指摘がある（松見 2022 p.499）。

## 6 壱岐島出土の九州型石錘の材質の特徴

玄界灘沿岸地域における九州型石錘の特徴として、加工の容易な軟質の滑石を素材とするものが多く、他に粘板岩、花崗岩、玄武岩、泥岩、砂岩、白雲母片岩、凝灰岩が素材として併用される。大型品は滑石を素材とすることが多く、小型品は滑石のほか、砂岩や粘板岩なども目立つ（林田・中尾 2014）。壱岐島出土の九州型石錘では、頁岩が53%と半分以上を占め、砂岩16%、滑石15%と滑石の割合が低いことが特徴である（第9図）。

しかし、I類石錘は滑石製が62.5%と多数を占めることは、玄界灘沿岸地域の材質の傾向と一致し、使用痕の比較から、その大半が博多湾・糸島地域と同様の漁法（イカ釣漁等・大庭 2021）で使用されたと想定される。また不條地区出土のIB-2-い類（第2図3・表1-12）は石材の色調が赤灰色と博多湾で顕著な滑石と色調が類似し、形態を含めて博多湾からの搬入品の可能性がある。大型石錘のVI類石錘については、材質は博多湾沿岸地域でほとんどを占める滑石製のものは確認できず、地元産の凝灰岩製であり、在地生産されたと判断される。

## 7 動物遺存体からみた壱岐島の漁労活動

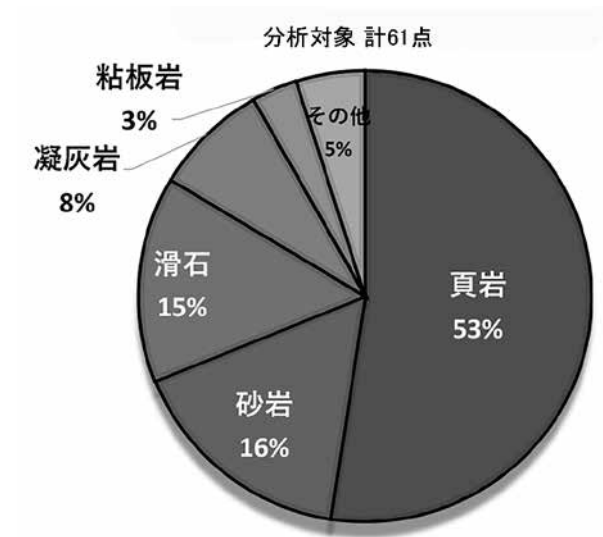
### (1) 原の辻遺跡

原の辻遺跡とカラカミ遺跡では、漁具とともに動物遺存体が多く出土しており、比較的多くの同定が行われている。原の辻遺跡では、環濠内から動物遺存体が確認されているが、種類は少ない。環濠内には小型魚類の骨の遺存はほとんどなく、犬の骨が目立ち、集落で多くの犬が飼育されていたことが予想されることから、犬が小型の魚類の骨まで食べていたことに影響された可能性がある。一方、魚類のうち、残りが良いマダイは骨が大きくて頑丈なため、最終的に犬も食べずに遺跡に残りやすい傾向が指摘されている（茂原・松井 1995）。

### (2) カラカミ遺跡

カラカミ遺跡では、動物遺存体から岩礁、砂礫底、砂泥、泥底の潮間帯から水深10m程度の範囲で、ウニ類・アワビ・サザエ等の採集が行われていたと推測され、干潮時に海岸を歩き回って採集したか、潜水漁で採捕していたと考えられている。なお、比較的深度の深い地点に棲息する貝類であっても、高い波浪や海流によって、海底から巻き上げられることもあるので、そのようにして打ちあがった貝類が浜辺で採集された可能性も指摘されている（富岡・立石・古賀・江川 2011）。

出土貝類のうち、弥生時代中期末ではスガイが比較的多く、弥生時代後期ではサザエの捕獲が増加する。これは大きさのあるスガイを選択的に採集したとみられること、サザエの蓋の大きさの集中は、サザエの捕獲をある程度集中的に行う、ないしは小型で成長途中の個体を意図的に捕獲しなくなった



第9図 壱岐島出土九州型石錘の素材

ことを示す可能性があり、資源を管理し、枯渇を回避する意図があったとみられる（古賀・立石・富岡 2013）。

一般的に、弥生時代の海浜部の遺跡ではアワビなどの大型の貝殻の出土が増え、交易品として重視されたことで、アワビの採捕が盛んになったとみられるが、カラカミ遺跡からアワビ殻の出土は集中的に確認された土坑以外は少なく、評価が難しい。特に、弥生時代後期以降の神奈川県三浦半島の洞窟遺跡における膨大なアワビ殻の出土と比べるとかなり少ない印象を受ける。なお、鯨骨製アワビオコシの存在は、倭の水人を示すものとして有名であるが、使用による欠損・再加工など著しい使用痕も少ないようにみえること、先に示すようにアワビ殻の出土は非常に少ないことから、鯨骨製アワビオコシは主に何らかの象徴的な場で使用されたことも想定すべきと考えている。

魚類の動物遺存体では、フエフキダイ科、タイ科がそれぞれ3割を占め、岩礁帯や沿岸を回遊する魚種が多く出土し、刺突具からも沿岸部の岩礁帯が主な漁場であったと推測され、外洋魚を積極的に捕獲した痕跡は認められない。

このように、カラカミ遺跡では岩礁帯が重要な漁場となっており、平野部に立地する原の辻遺跡と比べると、より多くの海産物に依存していたことが予想される。しかし、貝類が多量に棲息する干潟の発達に恵まれず、大規模な貝塚を形成するまでの採貝活動ができなかったため、動物遺存体の出土が小規模な貝層や湿地性の包含層に限定された遺存環境も留意する必要がある。またイノシシ属の骨にみられるイヌによる多数の咬痕から、イヌだけでなく、タヌキ、カラスなどによる死肉漁りが予想され、特に小型の魚骨などの骨は全体が食べられて消失した可能性がある（丸山他 2013）。

以上、両遺跡の動物遺存体の特徴から壱岐島では、島の周辺は全体的に水深があり、波も荒く、岩場など岩礁帯が多く、漁場としては主に島の沿岸の小規模な砂浜や浅い海に棲息する魚介類が主な捕獲対象で、時には大型魚を釣漁・刺突漁を組み合わせて捕獲していたことが窺える。

## 8 壱岐島出土九州石錘の特徴からみえる壱岐の海人の特徴

これまで原の辻遺跡、カラカミ遺跡、車出遺跡群という、遺跡ごとに九州型石錘の特徴をみてきたが、調査事例が少なく様相が明らかでない車出遺跡群は除き、原の辻遺跡とカラカミ遺跡では両者が領域とした海の生態系や環境、集落規模、消費規模等を要因として、出土石錘の量・種類・組成が大きく異なる。弥生時代後期になると、壱岐島では骨角製漁具が衰退ないしは消滅し、代わりに弥生時代中期後半から九州型石錘を中心とする博多湾・糸島半島の影響を受けた漁具・漁法の使用が開始されることから、漁労活動に大きな変化が生じている傾向は両遺跡共通する。これについては、楽浪郡の設置や鉄素材等の物資や技術、情報を求めるための対外交易の活発化が背景にあったとみられる。

一方、多種多様な九州型石錘が盛行する博多湾・糸島半島の石錘の動向と一致する原の辻遺跡に比べ、カラカミ遺跡では釣用錘の一部のみと、種類、出土量が大きく異なる。

原の辻遺跡とカラカミ遺跡の異なる様相の背景として、先行研究では比較的広い平野を有し、水稻農耕主体の集落である原の辻遺跡と、内陸部の谷間に位置し、漁労活動や鉄器生産などの諸生産活動を主体とするカラカミ遺跡という、生業・生産活動の違いが指摘されている（松見 2016）。

よって、カラカミ遺跡は谷水田、漁労、狩猟、鉄器生産と、生業の中で水稻農耕の割合が高い原の辻遺跡に比べ、複数の生業を組み合わせた網羅的な生業構造を示す。この網羅的な生業構造がカラカミ遺跡における九州型石錘の出土量と種類の少なさに表れており、漁労活動が生業の一部ではあるものの（註4）、自給自足的な内容・量であったと予想される。加えて原の辻遺跡でも、博多湾・糸島半島の影響を受け多角化は志向するものの、石錘の出土量が大きく増えないこと、かつ網漁は発達せ

ず、原の辻遺跡の領域内で必要な消費量は超えない規模の漁労内容と予測される。

博多湾沿岸地域では、弥生時代後期終末～古墳時代前期前半に備讃瀬戸地域由来の棒状土錘や管状土錘Cと製塩土器、大阪湾岸由来の飯蛸壺や製塩土器が導入することで、漁労活動が大型化・拡大化し、塩蔵加工品の生産や流通を含むシステムも整備される（大庭 2022）。その代表的な遺跡である古墳時代前期前半の福岡市西新町遺跡では、備讃瀬戸地域からの管状土錘Cやこれまでの在在系石錘に加え、新たに西新町型石錘を生み出し、多量の飯蛸壺も含め、多種多様な漁具を有する（山中 2007）。西新町遺跡で対象とする漁法や水産物は明らかでない部分が多いが、管状土錘Cによる袋網系の網漁や石錘の一部を用いた釣漁、飯蛸壺延縄漁など複数の漁法が存在したと考えられる（乗松 2010）。博多湾・糸島半島では多様な水産物を捕獲・加工し、それを交易品とする状況から、従来の漁労活動の空間や水産物の利用方法、集団労働の在り方など、資源の自給自足的状況が大きく変化し、集団間の相互依存が強まったことが想定できるが、壱岐島ではそのような状況はみられない。

これは、海浜部集落背後の内陸部の農耕集落の需要・消費量とその流通構造の違いに起因すると考えられる。原の辻遺跡では博多湾・糸島半島の影響を受け、多角化またはこれまで培った漁労技術を発展させてⅡB類石錘のような独自の形態の漁具・漁法を創出するが、基本的に水産物は集落や領域内部での自己消費用であったため、博多湾・糸島半島のような大規模な網漁の発達に伴う集団再構成を行わず、漁労活動の集約化はもとより、拡大化やシステム化は志向しなかったといえる。

西川修一氏は、弥生時代後期、外部から供給される物資を調達するニーズの高まりに対する代償の確保を図るため、列島各地の特産物的な物資を創出し始め、後代の律令制下の「調・贄」のような、「交易」の端緒となったこと、さらに多様かつ高価値の「財」を生み出した海浜部の漁村が大量の物資が行き交う地域内の特定の場所＝「湊」「港湾」へとシフトしたと指摘する（西川 2015）。古墳時代前期前半の西新町遺跡の漁労活動もその流れで捉えられるが（大庭 2021・2022）、壱岐島の漁労活動においては、そのような発展段階を見出すことはできない（註5）。

原の辻遺跡では、南北市糶の記事や交易品である布・玉等に代表される顕著な諸生産活動の痕跡は明確ではなく、地の利を活かし対内外交易により必要物資は入手することができたため、生産活動自体が低調であったという意見（松見・古澤 2016 p.224）を踏まえると、壱岐の海人が交易で用いた列島側のコメ・布・玉・塩・木製容器（漆）や当時の対内外交易の運搬具となる準構造船の部材であるクスノキやスギなどの大型の木材（柴田 2022）など、壱岐島の集団が用いた木製品などの諸道具や原材料、生活物資も含めて、あくまでも博多湾・糸島半島周辺の集団が生産・調達した物資への外部依存度が高く（註6）、この依存体質が生産活動、漁労活動の拡大化・システム化まで至らなかったと考えられる。

また、原の辻遺跡とカラカミ遺跡の石錘の様相の違いは、漁具は海的环境に応じて異なることを考慮しても、それぞれの海人が行う日常的な交流の相手先や内容が異なっていた可能性、いわゆるローレベルの交易圏や生活圏が両遺跡では異なっていたことを示す可能性がある。

このことについて、壱岐島出土の朝鮮半島系土器の傾向からみると、原の辻遺跡における楽浪系土器と三韓系土器については、三韓系土器は遺跡東西で同程度出土するのに対し、楽浪系土器は出土分布が西側に偏る（古澤 2016a）。土器の系譜と分布が列島に渡来した集団の足跡をたどったと理解すれば、楽浪系集団と三韓系集団が別個に交流経路を持ったことを示唆しており、相手先、交渉内容に応じた受け入れ先等の対応が異なっていた可能性がある。楽浪系集団と三韓系集団が滞留した場所も遺跡内である程度分かれていたと想定される（古澤 2016a p.220）。これについては、博多湾沿岸地域の海浜集落と朝鮮半島系遺物の出土傾向と同様の状況である（森本 2015b p.61）。

さらに、楽浪系遺物の出土は原の辻遺跡やカラカミ遺跡等の大規模集落に偏るため、渡来する楽浪系集団は大・中規模の集落でなければ対応できなかった規模であった可能性を示す。一方、三韓系土器は小規模な遺跡からも出土することから、日常的な交易活動の範囲内の渡来であり、渡来頻度は高かったものの、三韓系集団の規模は小規模集落でも対応できる渡来規模であった可能性が指摘されている（古澤 2018 p.107）。

このように、壱岐島では弥生時代前期末～中期には朝鮮半島南部の海人と移住や移動を含む日常的な交流が開始されるが（註7）、楽浪郡設置を契機として交流システムが変化し、弥生時代後期には交易と外交に交流の軸足が遷移し（古澤 2019）、楽浪系集団と三韓系集団はそれぞれ別の交流ルートを持ち、交流目的や交流相手も相互に異なっていたとの指摘がある（古澤 2018 p.107）。

さらに、カラカミ遺跡出土では弥生時代中期後半の遠賀川以東系の跳ね上げ口縁甕、後期中葉の安国寺式など、地域との関係を有していたことが指摘されている（宮本 2022 p.483）。なお、後期終末の豊前系複合口縁壺が韓国金海長有里遺跡で出土していることから（武末 2013 p.13）、カラカミ遺跡の集団を仲介者とする韓国側の交流相手として韓国金海地域の集団が想定できる可能性がある。また推測とはなるが、遠賀川以東地域の集団が鍛冶技術習得のためカラカミ遺跡と往来していたことも予測されよう。

原の辻遺跡は内海湾、カラカミ遺跡は片苗湾、車出遺跡群は半城湾という、船舶の良好な停泊地となる湾（外港）を有する。これらの湾はいずれも奥行きが十分にあり波風を避けられることから、必然的に港津が形成されたともいえる。なお、各遺跡からは直接湾を視認することはできないことも特徴である。

これらの湾のそれぞれ「Google Earth」を使って海から見てみると、壱岐島は最高峰の岳の辻でも標高約213<sup>米</sup>であることから、比較的なだらかで、先の湾に至る海のいずれのルートも外洋航海の目印となる「山」などのランドマークに乏しい。そうすると、原の辻遺跡に至る内海湾であれば、南側の岬（権現山・筒城崎）と北側の岬（長者原崎・左京鼻）を目印に航海することになる。特徴的なランドマークに乏しいので、原の辻遺跡に至るためには水先案内人が必須であったと想定されるとともに、航海ルートや交易相手もある程度限定された可能性がある。以上、壱岐島の地形的条件も交易の在り方に影響を与えていた可能性も考慮する必要があると考えている。

このように「南北市糴」という交易構造は、銅鏡等からみえる政治的な対外交渉などのハイレベルな交流、土器等からみえる日常的な交易などのローレベルな交流、いずれにおいても浦（集落）ごとの独自性が強く、それぞれが朝鮮半島や北部九州の諸地域と独自の交流ルートを持っていた可能性があり、時期ごとに朝鮮半島南部の交流先も変化した可能性がある。

これは武末氏が弥生時代の列島と朝鮮半島南部との交流の在り方で指摘した「多様性」、「多重性」、「多軸性」を持ちながら展開したこと（武末 2013）と整合する。

よって、『魏志』倭人伝に記された一支国という、弥生時代後期～古墳時代前期のさほど広い領域ではない場所においても政治的・社会的構造は外部依存のリスクを回避するための集落同士の相互依存関係が意識されつつも、各集落を統合するような強い求心性をみることができず、表層的な面があり、実際の地域社会構造は複雑であったことを示している可能性がある。

## まとめ

以上、壱岐島における九州型石錘の分析を通して、石錘の年代、型式、割合、出土量などの組み合わせから集団の特徴、博多湾沿岸地域との比較から、弥生時代中期後半以降、楽浪郡を介する長距離

交易などに伴い、壱岐島の海人と博多湾・糸島半島周辺の海人との日常的に密な関係が認められた。石錘を用いた漁労活動に従事した人々の一部は日常的に博多湾・糸島半島から壱岐島へ至るルートで交易を行っており、そのルートを通じたヒト・モノ・情報の流れを実証的に捉えることができた。

壱岐島で出土する弥生時代中期後半の土器の形態や構成は、糸島地域の土器と酷似する。特に石橋新次氏は伊都国域で特徴的な鋤先口縁の広口壺や袋状口縁壺などを「糸島型祭祀用土器」と呼び、この「糸島型祭祀土器」が西北九州を中心に展開する要因として、海上交易及び政治的交渉が伊都国を中心に進められたためと理解した（石橋 1992 p.41）。これは、弥生時代中期後半、土器を用いた儀礼様式が共有されるという、地理環境が区分する地域社会を超えて、地域圏同士の明確な結びつき、一体性が表出されたことを示すと考えられる。

今回の壱岐島における九州型石錘の検討においても、主に弥生時代中期後半以降、九州型石錘の定型化及びサイズが分化し、分布が拡大する様相（大庭 2023）と整合し、壱岐島でも弥生時代中期後半、利器の鉄器化の進行、地域集団の形成が進み、人口が増加したことにより、水産物の需要を高め、漁具の改良を促したと理解される。

さらに岡部裕俊氏は、一支国が距離的に近い末盧国ではなく、伊都国との連携に踏み切った理由の一つとして、伊都国と末盧国の農業生産力の差によることが基本にあるとした。一支国では伊都国における三雲南小路遺跡・井原鎌溝遺跡、奴国における須玖岡本遺跡に相当する地域集団の中心的な個人の存在を示す遺構・遺物は明確ではなく、交易の実務に携わった一支国と、海上交易・対外交渉を掌握した伊都国・奴国という機能分担が確立し、海上交易権の掌握を望む伊都国と「南北市糶」の安定化を図る一支国の思惑の一致をみた考えを示す（岡部 2007 p.40）（註8）。

このことは、今回の石錘の検討結果と調和的であるが、では距離的に一番近く、一支国の次の『魏志』倭人伝ルートにもあたる末盧国、唐津地域と壱岐島との交流の密度は、漁労技術という日常的な交流や楽浪系土器の出土が唐津地域では少ないことなどの様相からも、博多湾・糸島半島より低いと想定される。

「Google Earth」で原の辻遺跡から糸島と唐津を望めば、原の辻遺跡からの直線距離では糸島まで約38<sup>キロ</sup>、唐津の呼子まで約28<sup>キロ</sup>と唐津までの距離の方が短いですが、糸島半島の標高365<sup>メートル</sup>の可也山をランドマークとしたルートを見ると、その途中名島・本島などの海上の目印となる小島・瀬がある。当時の準構造船による沿岸沿いの地乗り航法では航海上の標識が明確である必要があり、約38<sup>キロ</sup>という距離も対馬・壱岐間の直線距離が約50<sup>キロ</sup>ということを考えれば、1日の航行距離としては十分可能な範囲と考えられることから、糸島半島との直接的な交流が深かったと思われる。

では魏からの遣使はなぜ末盧国を介したのであろうか。

想像たくましく考えれば、正式な遣使である以上、邪馬台国連合を構成する末盧国で船を降り、伊都国まで陸行することで、邪馬台国内の諸国にアピールできたこと、また魏の遣使は楽浪郡の船を用いており、倭のものより大型船であったため、糸島半島の御床松原遺跡や潤地頭給遺跡などの砂丘や潟湖沿いに位置する伊都国の港津に直接入港できなかったことなど、様々な可能性が考えられよう。

壱岐島の漁労活動の在り方として、博多湾・糸島半島と壱岐島という隣接する地域間の連続した交流、かつその時間幅も弥生時代中期後半、後期前半の一時衰退を経て、後期後半～終末、古墳時代前期前半までの長期間にわたり、広く九州型石錘が共有され、釣漁を中心とする共通する漁労技術が認められる。壱岐島の南北市糶の実態は、海に囲まれ、生産力に乏しい壱岐では他地域との交易を行うためには、日常的に海に出て漁を行って海を熟知した人々が拓いた海上交通ルートに乗ることではじめて他地域との交易が可能であり、その内容も波や変動がありながらも、博多湾・糸島半島と壱岐島

の海人の漁業圏と日常の生活・交易圏が継続的に重なり合うことで成立したといえる。このルートは今回検討した漁具・漁法以外にも先進的な文物や技術だけではなく、卜骨等精神文化まで及んだとみている。

しかし、壱岐島の海人は漁労活動の多様化は志向しても、島内の消費量の限界から博多湾沿岸地域のように生産・流通の拡大化・システム化までは及んでおらず、集約的ないしは専門的な段階までは至っていない可能性を今回提示できた。このことは自立性が低く、外部依存が高い地域社会とみられる反面、地の利を活かし、鉄器などの外部物資との交換のため、国内外の集団との安定的な地域間関係を築いていたと捉えることもできる。一方、原の辻遺跡・カラカミ遺跡における石錘の様相の違いは、立地環境やそれぞれの漁労活動だけではなく、深江田原という沖積地の水田の経営システム整備を志向した原の辻遺跡と農耕・漁業・手工業と網羅的な生業形態を志向したカラカミ遺跡との集団・社会構造の特徴が異なることも反映していることが予想される。

以上のことから、広域的なネットワーク機能ともいえる南北市糶の内容は単純ではなく、地域や地形等の諸条件によって、複雑な組み合わせにより成り立っていた可能性を指摘することができる。また古墳時代初頭における原の辻遺跡やカラカミ遺跡の衰退も、西新町遺跡を含む博多湾沿岸の集団主導の交易システムの整備に伴い、交易を管理・統制するようになったため、中継地としての壱岐島の集団の役割が低下したと推測される。

なお、いうまでもなく今回の石錘を中心とする検討は壱岐島内における物質的生産のごく一部であり、生業・生産機能の総合的な把握とその全体的な関係性はもとより、壱岐島内での集落動態の中での個々の集落の機能や差異、集落間の分業的關係など、地域社会構造を推測するための研究・資料も発展させる必要があると感じている。さらに対内外交流・交易活動における一時的・短期的な人の移動の在り方やハイレベルとローレベルの交流・交易の相違点、関連性などの議論も不十分である。

加えて、漁労活動や対外、列島内各地との交易活動は、中世段階で新羅に向いた倭寇は5～8月に集中すること、海の気象条件から年間通しての外洋航海は難しく、特に海が荒れる冬場は困難である。かつ初夏から初秋にかけての漁労活動の最盛期と、時期的に重複したことが予測される。この漁労活動と対外交易との関係性についても今後の課題である。

今後、壱岐島を理解する上では、こうした多角的な観点からの研究を深める必要があり、さらなる調査研究の進展に期待したい。

本稿は、jsps 科研費 jp18K01085の成果を一部含む。

本稿を執筆するにあたり、古門雅高氏には執筆の機会を与您いただき、原の辻遺跡出土石錘の資料調査にあたっては壱岐市教育委員会の松見裕二氏にご配慮いただいた。また写真の掲載にあたっては壱岐市教育委員会からの許可を受けた。深く感謝申し上げます。

本稿は拙書『玄界灘における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館2023年のIV章4「九州型石錘からみた壱岐島の海人集団の特質」をもとに、『カラカミ遺跡 総括編 I』等の最新の成果とその後の筆者の考えを加えて構成したものである。

#### 【註】

註1 原の辻遺跡の船着き場遺構は、単に港津の整備に留まらず、弥生時代中期段階では原の辻遺跡の集団が対外交易をある程度管理・掌握する機能ないしは意図をもっていた可能性を示す。また船着き場遺構は直接的な朝鮮半島系技術者の指導や監理のもと築造された可能性が高く、一時的・短期的な人の移動が想定さ

れる。

- 註 2 外洋航海に耐えうる準構造船に必要な大木については、壱岐島内で確保は難しいと考えられ、対外交易で使用した準構造船自体は多様な工具の存在から、博多湾沿岸地域で製作した可能性を考えている。
- 註 3 原の辻遺跡では、壱岐島において九州型石錘が出現する弥生時代中期後半に楽浪系土器の出土例があり、楽浪郡との直接的な交流の開始が想定されること（古澤 2016b）、また中期後半は伊都国・奴国の首長墓への前漢鏡の多量副葬など、中国・楽浪郡と北部九州の地域集団との交渉がこれまでとは別次元に及んだことが予測される。壱岐島での九州型石錘の出現はこの動きと時期的に一致しており、日韓両地域の海人の活動内容や範囲が対外交渉の発展に影響され、大きな変化をもたらしたことを示している可能性がある。
- 註 4 海や大きな河川から離れた立地を示すカラカミ遺跡において、漁具がまとまって出土する状況は、集落と漁労エリアが大きく離れた生業パターンが始まることを示している可能性がある。
- 註 5 西新町遺跡の半島系土器の組成と原の辻遺跡の組成が類似することから、壱岐島は「交易の拠点から交易の中継点へ役割を変えた」可能性が指摘されている（松見・古澤 2016 p.226）。つまり、壱岐島は長らく朝鮮半島からの渡来集団の移住地であるとともに、韓と倭を結ぶ役割を担ってきたが、操船技術の進歩とともに、西新町遺跡の海人集団が外交交渉や読み書きを含む朝鮮半島までの長距離のパイロットを担ったことで、壱岐島は交易拠点機能が低下し、中継地としての役割がメインとなった可能性がある。
- 註 6 カラカミ遺跡では鉄器という特産物が存在した可能性があるが、その規模と内容、時期も限られており、交換財としては限定的とみている。
- 註 7 武末純一氏は、韓国靑島遺跡出土鹿角製アワビオコシを検討する中で、靑島遺跡のものと北部九州のアワビオコシの形態的な類似性に加え、鳥取県青谷上寺地遺跡出土鹿角製アワビオコシとの共通性、西九州型結合式釣針などの分布域から、弥生時代中期の靑島遺跡には北部九州の海人もかなり居住し、山陰地域の海人も含まれていたとし、靑島遺跡、壱岐島を含む玄界灘沿岸地域、山陰地域とを相互を往来する交流ネットワークの存在を指摘する（武末 2009 p.291）。このことから、弥生時代前期後半～後期、外洋的に熟練した漁労技術を有する壱岐の海人の行動範囲は日本海沿岸まで及んだ可能性があるが、弥生時代後期後半になると、花仙山産碧玉の搬入と技術体系の移植による山陰系管玉生産が博多湾沿岸地域と紫川流域で認められ、この時期に山陰地方から生産技術が移植され、古墳時代前期まで継続する（谷澤 2019）。このような玉生産の痕跡は壱岐島にはない。この山陰からの素材の運搬や技術移植に博多湾沿岸地域の海人が関与していたとみられ、この時期には壱岐の海人の活動範囲が限定されていたことを示している可能性がある。
- 註 8 久住猛雄氏は、糸島半島の三雲・井原遺跡では多器種の楽浪系土器が卓越することから、政治的な交渉や威信財交易を行う楽浪漢人は三雲・井原遺跡に滞在し、三韓の人々の多くは外港としての壱岐止まりで日常的な交易を行っていたという交易の機能分担を指摘し、これを「原の辻＝三雲貿易」と呼んだ。その後交易の中心は博多湾に遷移し、古墳時代前期前半には「後期博多湾貿易」と呼ぶ福岡市西新町遺跡を中心とする交易機構が発展する在り方を提示する（久住 2007）。

#### 【引用・参考文献】

- 石橋新次 1992「糸島型祭祀土器の成立とその意義」『北部九州の古代史』 名著出版
- 内田律雄 2016「九州型石錘についての覚書－下條分類A I型－涙滴形石錘の成立と展開－」『海と山と里の考古学－山崎純男博士古稀記念論集－』 山崎純男博士古稀記念論集編集委員会
- 大庭孝夫 2021「九州型石錘の機能に関する一試論－福岡市西新町遺跡出土石錘を中心に－」『九州歴史資料館研究論集』46 九州歴史資料館

- 大庭孝夫 2022 「漁具からみた西新町遺跡海人集団の特質 - 西新町型石錘を素材として -」『九州歴史資料館研究論集』47 九州歴史資料館
- 大庭孝夫 2023 『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館
- 岡部裕俊 2007 『倭人の海道 - 一支国と伊都国 -』平成19年度秋季特別展図録 伊都国歴史博物館
- 川道寛・古澤義久 2016 『原の辻遺跡総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 長崎県教育委員会
- 久住猛雄 2007 「『博多湾貿易』の成立と解体」『考古学研究』53-4 考古学研究会
- 古賀日香理・立石和也・富岡直人 2013 「1977年・2011年カラカミ遺跡発掘出土軟体動物門と棘皮動物門」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ』九州大学人文科学研究院考古学研究室
- 茂原伸生・松井章 1995 「原の辻遺跡出土の動物遺存体」『原の辻遺跡』長崎県文化財調査報告書第124集 長崎県教育委員会
- 柴田昌兎 2022 「朝鮮半島系準構造船（加耶タイプ）の生産と日韓の造船技術」『纏向学の最前線 纏向学研究センター紀要』第10号 桜井市纏向学研究センター
- 下條信行 1984 「弥生・古墳時代の九州型石錘について - 玄界灘海人の動向 -」『九州文化史研究所紀要』29 九州文化史研究所
- 下條信行 1989 「弥生時代の玄界灘海人の動向」『横山浩一先生退官記念論集Ⅰ』横山浩一先生退官記念事業会
- 白石溪冴 2020 「原の辻遺跡の船着き場跡」『土を盛り、石を築く - 土木・建築技術にみる東アジア交流 -』令和2年度東アジア国際シンポジウム 長崎県埋蔵文化財センター
- 武末純一 2009 「三韓と倭の交流」『国立歴史民俗博物館研究報告第151集』国立歴史民俗博物館
- 武末純一 2013 「金海会岷里貝塚出土の弥生系土器」『朝鮮学報』第228輯
- 谷澤亜里 2019 「古墳時代の山陰系玉類 - 出雲地域、北部九州地域の様相から -」『古墳時代の玉類の研究』鳥根県古代文化センター研究論集第21集 鳥根県古代文化センター
- 富岡直人・立石和也・古賀日香理・江川達也 2011 「カラカミ遺跡出土軟体動物門と棘皮動物門」『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ - カラカミ遺跡第1地点の発掘調査（2005～2008年）』九州大学人文科学研究院考古学研究室
- 中尾篤志 2022 「玄界灘と対馬海峡の海と弥生人」『考古学ジャーナル』No.763 ニューサイエンス社
- 中塚武・鎌谷かおる・佐野雅規・伊藤啓介・對馬あかね 2021 『新しい気候観と日本史の新たな可能性』気候変動から読みなおす日本史1 臨川書店
- 西川修一 2015 「洞穴遺跡にみる海洋民の様相」『海浜型前方後円墳の時代』同成社
- 乗松真也 2010 「博多湾岸における備讃瀬戸系漁具の受容と背景」『九州考古学』85 九州考古学会
- 橋口達也・八幡一郎 1977 「半球形有孔滑石製品」『考古学雑誌』57-3 日本考古学会
- 林田好子・中尾篤志 2014 「九州型石錘の集成と展望」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号 長崎県埋蔵文化財センター
- 福田一志・中尾篤志 2005 『原の辻遺跡総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会
- 古澤義久 2016a 「総括 東アジアにおける原の辻遺跡」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 長崎県教育委員会
- 古澤義久 2016b 「原の辻遺跡における日韓交流」『大海を渡り、一支国に至る。 - 国境の島 壱岐・原の辻遺跡における日韓交流 -』平成28年度東アジア国際シンポジウム 長崎県埋蔵文化財センター
- 古澤義久 2018 「弥生時代壱岐島における韓半島系資料」『土器・金属器の日韓交渉』「新・日韓交渉の考古学 - 弥生時代 -」研究会
- 古澤義久 2019 「『魏志倭人伝』に記された「南北市糶」の具体像」『玄界灘の交易要衝『一支国』』令和元年度秋季特

別展図録 伊都国歴史博物館

- 松見裕二・古澤義久 2016「原の辻遺跡の盛衰」『原の辻遺跡 総集編Ⅱ』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 長崎県教育委員会
- 松見裕二 2016「海の王都・一支国『魏志』倭人伝に記された一支国の世界」『『魏志』倭人伝に記された一支国の世界』 壱岐市教育委員会
- 松見裕二編 2022『カラカミ遺跡 総括編Ⅰ』壱岐市文化財調査報告書第33集 壱岐市教育委員会
- 真鍋篤行 1995「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第8号 瀬戸内海歴史民俗資料館
- 丸山真史・丸崎哲也・松井章・江田真毅・覚張隆史・米田穰「カラカミ遺跡から出土した動物遺存体」『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ－カラカミ遺跡第5～7地点の発掘調査(1977・2011年)』九州大学人文科学研究院考古学研究室
- 宮崎貴夫 2001「原の辻遺跡における歴史的契機について」『西海考古』第4号 西海考古同人会
- 宮本一夫 2022「カラカミ遺跡から広がる交流ネットワーク」『カラカミ遺跡 総括編Ⅰ』壱岐市文化財調査報告書第33集 壱岐市教育委員会
- 村上恭通 2022「調査成果からみるカラカミ遺跡の鉄製品」『カラカミ遺跡 総括編Ⅰ』壱岐市文化財調査報告書第33集 壱岐市教育委員会
- 森本幹彦 2015a「海人集団の東西－九州型石錘の再検討－」『みずほ別冊2 弥生研究の交差点』大和弥生文化の会
- 森本幹彦 2015b「外来系土器からみた対外交流の様相」『古代文化』66-4
- 森本幹彦 2019「漁具の様相」『元岡・桑原遺跡群34』福岡市埋蔵文化財調査報告書1385集 福岡市教育委員会
- 森本幹彦 2023「現代社会と考古学③ 考古学からみた新技術」『考古学研究』第69巻第4号 考古学研究会
- 山下義満 2016『天草漁撈の伝統』
- 山中英彦 2007「『博多湾貿易』を支えた古代海人」『古文化談叢』第57集 九州古文化研究会
- 山梨千晶 2019「壱岐における弥生時代の鉄」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 長崎県埋蔵文化財センター